Ichthyological Research 44巻3・4号掲載論文 和文要旨

北西太平洋におけるオナガザメの1種ハチワレの生殖生態

陳 哲聰・劉 光明・張 永州

本論文 44(3): 227–235

1984年1月から10月，1992年10月から1994年3月までの間，台湾近海において合計629尾のハチワレを採集し，その生殖生態について調査を行った．

雄雌の性成熟に達する大きさは各々全長332.0–341.1 cm，270.1–287.6 cmであった．また，ハチワレ胎仔は食卵型で，胎仔の発育段階を胎仔の形態と摂取する栄養に基づき，卵殻内での3段階，孵化後の3段階に分けることができた．産出時の胎仔の大きさは135–140 cm，胎仔数は平均2尾，胎仔の性比は1:1であった．入手したほとんどのメス成魚は周年妊娠していることから，妊娠期間の推定はできなかった．本種は少数の大型の子を産むこと，および一定の交尾期と出産期をもたない，という生殖戦略を持つ．

(国立台湾海洋学院)

日本海におけるクロソイの初期生活史

永澤 亨・土門和子

本論文 44(3): 237–248

各種ネット採集で得られた標本に基づいてクロソイ仔稚魚の形態発育史を記載すると共に，分布，食性などの知見を取りまとめた．仔魚は脊索長約5.4 mm前後の前屈曲期仔魚として産出される．脊索後端の上屈は5.6–7.5 mmに行われ，後屈曲期仔魚となる．変態は体長約13 mmで開始され，体長約20 mmで浮遊期稚魚となる．前屈曲期および屈曲期の仔魚は尾部の背・腹両面および直腸部腹面の色素胞配列および類似仔魚と識別できる．屈曲期以降の仔稚魚は背面および側面に黒色素胞が多く分布し，表層生活への適応が示唆された．仔稚魚は200 m以浅の沿岸域に広く出現したが，本州沖合の冷水域には出現しなかった．体長20 mm未満の仔魚は表層で生活する．体長20–40 mmの稚魚でも主たる生息場所は流れ藻のない表層であると推定されたが，流れ藻に随伴する個体も多かった．また体長約28 mmからは底性生活に移行した稚魚も認められ，稚魚は表層（流れ藻なし），流れ藻，そして底層と異なった3タイプの生息場所に出現することが明らかとなった．体長7 mm未満の仔魚は主にかいあし類ノープリウスを，20 mm未満の仔魚はカラヌス目かいあし類および*Evadne nordmanni*を主体として摂餌していたが，変態期以降は魚類卵・仔魚が重要な餌量となっていた．特に流れ藻に随伴していた稚魚は藻に付着するサンマ卵およびサヨリ卵を飽食していた例が多く認められた．このことから餌となる卵の集中的な分布がクロソイ稚魚の流れ藻へ随伴する要因の一つであると推察された．

（永澤：〒951 新潟県新潟市水道町1–5939–22 日本海区水産研究所；土門：〒046 北海道余市郡余市町浜中町238 北海道立中央水産試験場，現住所：〒001 札幌市北区北24西15，2–20）

ドジョウ科の1新種*Iksookimia yongdokensis*の記載および*Iksookimia*屬の種の検索

金 益秀・朴 鍾泠

本論文 44(3): 249–256

韓國慶尚北道の東海岸を流れる複數の河川集團にもとづき，ドジョウ科の新種*Iksookimia yongdokensis*（新稱，동방종개）を記載した．本種は同屬の他魚種から以下の点で識別できる．雄の胸鰭の基部に縮小骨質盤を持ち，體側下部には9–13本の横帯があり，鰓耙數は13–14，尾椎骨數は17–20，鱗の中心域は廣い．*Iksookimia*屬の種の檢索を示し，彼等の地理的分斷分布について論議を行った．

（〒561–756 大韓民國全羅北道全州市德津洞 全北大學校自然科學大學生物學科）

ヤマノカミの卵および仔稚魚

竹下直彦・鬼倉徳雄・松井誠一・木村清朗

本論文 44(3): 257–266

水槽内で産卵させたヤマノカミの卵を飼育し，卵内発生と仔稚魚の形態を記載した．卵は淡赤黄色を呈し，直径1.98–2.21 mmで多数の油球をもつ．水温2.3–11.3°Cにおいて，産卵後30日で孵化した．孵化直後の仔魚は脊索長6.9–7.3 mmで，筋節数は9–10+25–26=34–36，直径約0.4 mmの単一の油球を備えていた．孵化後5日で脊索長8.2–8.4 mmになり，卵黄をほぼ吸収し終え，胸鰭鰭条数が16–17に達し，頭頂棘，頸棘，前鰓蓋棘が認められた．孵化後11日で脊索長8.9–9.5 mmになり，油球が消失し，上擬鎖棘が形成された．孵化後15日で脊索長9.7–10.3 mmになり，脊索の上屈が始まった．孵化後20日で体長10.7–10.9 mmになり，後側頭棘が出現した．孵化後23日で体長12.0–13.7 mmになり，第一背鰭棘数(VII–VIII)，第二背鰭鰭条数(18–19)，腎鰭鰭条数

(16–18)が定数に達した．孵化後27日で体長13.8–15.8 mmになり，腹鰭(I, 4)が形成され，頭部と体側に黒色帯が出現した．孵化直後の仔魚は水槽の表層を遊泳したが，油球吸収後中層を遊泳し始め，稚魚期に着底を開始した．

（竹下：〒759-65 下関市永田本町2-7-1 水産大学校生物生産学科；鬼倉・松井：〒811-33 福岡県宗像郡津屋崎町2506 九州大学農学部附属水産実験所；木村：〒813 福岡市東区香椎4-2-24）

ハタの初期飼育はどうして難しいのか？：チャイロマルハタ仔魚の摂餌に関する骨格形成からのアプローチ

河野 博・リザーオルドニオ アギラー・大野 淳・多紀保彦

本論文 44(3): 267–274

ふ化直後から242.5時間後までのチャイロマルハタの口腔を形成する骨要素の発達を調べた．基本的な要素は，開口時（ふ化後54時間）までには出現した．しかしその後，開口後165時間までは，下鰓弓と頭部の二，三の骨要素を除いて，摂餌に関する骨要素は出現しなかった．骨要素の新規出現とすでに出現していた軟骨の化骨は開口後165時間以降に見られたが，すべての骨要素の出現と化骨の開始は本研究の範囲（開口後188.5時間まで）では観察できなかった．口腔を形成する骨要素の形態と出現様式に基づくと，チャイロマルハタ仔魚の摂餌様式は，アカメ型（"sucking/grasping"）であると推察された．しかし各骨要素の出現と化骨化は遅く，本研究では，suckingからgraspingへの移行期は観察されなかった．このような，ゆっくりした摂餌関連骨格の発達は，ハタ類の仔稚魚飼育が難しいことの一因であると考えられた．

（〒108 東京都港区港南4-5-7 東京水産大学；アギラー現住所：フィリピン大学ヴィサヤ校；多紀 現住所：〒171 東京都豊島区高田3-18-11 システム科学コンサルタンツ）

マイワシの骨格形成

松岡正信

本論文 44(3): 275–295

マイワシの骨格系全般にわたって，その発達過程を記載した．ふ化直後の仔魚では，口は未形成で，軟骨や硬骨組織は全くなかった．ふ化後53時間の仔魚（4.2 mm NL［脊索長］）で頭部骨格が形成され始めた．ふ化後77時間の仔魚（5.5 mm NL）は摂餌開始期に当たり，頭部骨格と胸鰭支持骨の一部が形成されていた．10.5 mm NLの仔魚では，尾鰭や背鰭の支持骨の一部が形成され始めていた．椎体は18–22.7 mm SL（標準体長）の間に形成された．鰓耙は13 mm NLで下鰓弓に初めて認められ，鰓耙上の微小突起は25.05 mm SLでごく僅かに形成されていた．不完全神経間棘と背鰭第1近担鰭骨の距離（体長に対する%）は，変態期における背鰭の前方への移動に伴って次第に小さくなり，約34 mm SLでほぼ一定となった．この段階で，一部を除いて骨格系の基本構造はほぼ確立した．また，60–70 mm SLで歯骨の歯が完全に消失し，骨格系が完成した．以上の骨格形成過程に基づいて，4期8相からなる発育段階を区分した．

（〒850 長崎市国分町49 西海区水産研究所）

日本初記録のメギス科の1稀種スジモンニセスズメ（新称）

渋川浩一・岩田明久

短報 44(3): 297–301

石垣島および西表島の水深18–20 mから，日本初記録の*Pseudochromis striatus* Gill, Shao & Chen, 1995スジモンニセスズメ（新称）が採集された．本種は，いくつかの計数，計量形質の組合せのほか，体側に多数の細い暗色縦帯をもち，かつ尾鰭基部に半円形の暗色斑をもつことにより，他のメギス科魚類から容易に識別できる．本種はこれまで，稚魚1個体を含む3個体のみしか知られていなかったため，今回報告する日本産の6個体に基づいた詳細な記載をおこなった．

（渋川：〒108 東京都港区港南4-5-7 東京水産大学魚類学研究室；岩田：〒100 東京都千代田区千代田1-1 宮内庁侍従職）

中国産タナゴ類2種*Rhodeus lighti*および*Tanakia himantegus*の染色体におけるAg-NORsの変異

上田高嘉・益子宣崇・滝沢宏之・赤井 裕・石鍋寿寛・新井良一・伍 漢

短報 44(3): 302–305

中国産タナゴ類2種*Rhodeus lighti*および*Tanakia himantegus*について核型分析を行った．嚢胚および成魚の腎細胞から直接法による空気乾燥標本を作製し，通常のGiemsa染色および銀染色を行った．染色体数ならびに染色体構成は両種とも同じで，2n=48，28 M-SM+20 ST-Aであった．Ag-NORsをもつ染色体数とAg-NORsの染色体上の位置については両種共に個体内変異が見られ，*R. lighti*は1–5個，2タイプ，*T. himantegus*は0–4個，3タイプであった．Ag-NORsの数が4個以上であることおよび長腕端部のAg-NORsは，タナゴ亜科における初記録である．*R. lighti*において，成魚（1–3個，1タイプ）より嚢胚（1–5個，2タイプ）の方が変異が大きかった理由として，嚢胚の方がrDNAの発現が盛んであることから，より多くのAg-NORsが観察されたと考えられる．

なお，今回用いた成魚の腎細胞による染色体標本作製法は，遠心分離，組織を刻む操作を必要としないことから標本作製中における細胞の損出が少なく，簡便かつ優れた方法で野外実験に有用である．

（上田・益子・滝沢：〒321 宇都宮市峰町350 宇都宮大学教育学部生物学教室；赤井：〒260 千葉市中央区青葉町955-2 千葉県立中央博物館；石鍋：〒239 横須賀市鴨居4-1120 観音崎自然博物館；新井：〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻；伍：上海水産大学）

ガンテンイシヨウジにおける一夫一妻繁殖と性役割

渡部諭史・渡邊良朗・沖山宗雄

短報 44(3): 306–310

浜名湖において採集したガンテンイシヨウジ*Hippichthys penicillus*の繁殖行動を水槽内で観察した．雄2尾と雌4尾を収容したところ，2組のペアがそれぞれ3回繁殖を繰り返した．雄は自分と似た大きさの雌とペアを形成し，より大きな雌2尾は繁殖できなかった．ペアは産卵前のみでなく雄が育児嚢に卵を抱えて産卵が不可能な期間中でも求愛行動を行った．ペアを異なる水槽に一晩隔離して翌朝同じ水槽に戻すと，必ず雄がもとの配偶者に対して求愛行動を開始した．以上の観察結果から，本種は一夫一妻であり，他の複婚的ヨウジウオ類で知られているような求愛における性役割 (sex role)の逆転は生じていないと考えられた．

（〒164 東京都中野区南台1-15-1 東京大学海洋研究所資源生物部門）

アフリカ東岸産コニベ属魚類2種の同定

佐々木邦男

短報 44(3): 311–315

ニベ科コニベ属の2種，*Johnius amblycephalus* (Bleeker)と*J. dussumieri* (Cuvier)は南アフリカ共和国からインドにかけての沿岸域に広く分布すると考えられている．アフリカ東岸と他の海域から得られた標本を比較した結果，アフリカ東岸産の"*J. amblycephalus*"は*J. fuscolineatus* (von Bonde)に，"*J. dussumieri*"は*J. dorsalis* (Peters)に同定されることが明らかになった．*J. fuscolineatus*は*J. amblycephalus*と胸鰭条数，側線上方・下方鱗数および第1背鰭の高さが異なる．*J. dorsalis*は*J. doussumieri*と第1背鰭の鱗の有無，側線上方・下方鱗数および眼径で区別される．*J. fuscolineatus*は*J. amblycephalus*の*J. dorsalis*は*J. dussumieri*のジュニアシノニムとされてきたが，両種はともに有効である．*J. fuscolineatus*はモザンビク，南アフリカ共和国およびマダガスカルの沿岸に，*J. dorsalis*はケニアから南アフリカ共和国にかけての沿岸とマダガスカルの周辺に出現する．一方，*J. amblycephalus*と*J. dussumieri*はパキスタン以東にしか出現しない．したがって，不連続な分布を示す相互に類似した2種が，2組存在することになる．

（〒780 高知市曙町2-5-1 高知大学理学部生物学教室）

メジナ科魚類*Girella mezina*にみられる卵巣と腸管の特殊な位置関係

神田 優・山岡耕作

短報 44(3): 316–318

日本産メジナ科魚類オキナメジナ*Girella mezina*の卵巣と腸管との特殊な位置関係を明らかにした．本種は，巻きの中心が体軸前方の左右に2箇所と左後方の1箇所の大きく3つに分かれた極めて長い腸管を有し，卵巣が腸管に取り囲まれ，腸管の中心部に位置する構造を示した．この様な位置関係は魚類の中では報告例がなく，本種に特徴的な形質だと考えられる．

（神田・山岡：〒781-11 高知県土佐市宇佐町井ノ尻194 高知大学海洋生物教育研究センター）

東アジア産ササノハベラ属魚類の分類学的再検討

馬渕浩司・中坊徹次

本論文 44(4): 321–334

従来から種内多型が示唆され，標準和名でササノハベラ，学名で*Pseudolabrus japonicus* (Houttuyn)と呼ばれていた種を，形態的特徴の比較に基づいて分類学的に再検討した．その結果，全く異なった2種が含まれていることが判明したので，両種を詳しく記載し直した．学名としては，一方の種には*Pseudolabrus eoethinus* (Richardson)を適用するのが妥当であり，もう一方の種は新種とすることが妥当であると判明したので，*Pseudolabrus sieboldi*という新学名を与えた．*Pseudolabrus japonicus* (Houttuyn)の原記載は，*P. rubiginosus*と*P. eoethinus*のどちらの種とも一致せず，また日本産の他のベラ科魚類のどれにも一致しなかった．さらに，*P. japonicus*の模式標本は消失しており，この学名は現在のところ日本産のベラ科魚類のどの種にも適用できないことがわかった．これら両種は，主として，1) 体側上半分に多数の小白斑がある (*P. sieboldi*)，ない (*P. eoethinus*)，2) 眼の下縁を通る褐色線が鰓蓋中央部までしか達しないか，または，胸鰭の上方を通過し，体側中央部まで達する（前者），胸鰭基底上部に達する（後者）という特徴で区別できるほか，いくつかの計数・計測形質でも異なっている．標準和名については*P. sieboldi*にホシササノハベラ，*P. eoethinus*にアカササノハベラという新称を与えた．ササノハベラという従来の和名はこれら2種のどちらに与え

ても混乱を起こす可能性があるので，種には与えず，*Pseudolabrus*という属名についてのみ残すことにした．

（〒606–01 京都市左京区北白川追分町 京都大学農学部水産学科；中坊 現住所：〒606–01 京都市左京区北白川追分町 京都大学総合博物館）

タンガニイカ湖産カワスズメ科魚類2種，*Xenotilapia sima*および*X. boulengeri*の分類学的再検討

高橋鉄美・仲谷一宏

本論文 44(4): 335–346

アフリカ・タンガニイカ湖産カワスズメ科魚類の2種，*Xenotilapia sima* Boulenger, 1899と *X. boulengeri* (Poll, 1942)は，形態的に類似し，分類学的に多くの混乱が見られる．本研究では，模式標本を含む多数の標本をもとに，両種の分類学的検討を行った．その結果*X. sima*は，臀鰭と胸鰭の軟条数が多いこと，尾柄部が太いこと，臀鰭基底長が長いこと，そして眼が大きいことによって，*X. boulengeri*と明瞭に区別できることが判明した．

（高橋・仲谷：〒041 函館市港町3–1–1 北海道大学水産学部生産基礎生物学講座）

沖縄県宮城島後期鮮新世新里層から産出したキントキダイ科チカメキントキ属の新種トゲメキントキ*Cookeolus spinolacrymatus*

昆 健志・吉野哲夫

本論文 44(4): 347–356

沖縄県宮城島の後期鮮新世島尻層群新里層の砂質泥岩から産出した化石1個体に基づき，キントキダイ科の新種トゲメキントキ*Cookeolus spinolacrymatus*を記載した．本種は，現生種であるチカメキントキ*C. japonicus* (Cuvier, 1828)に極めて近縁であると考えられるが，涙骨前部に側方に向かう大きな棘があることで区別される．本化石標本の成長段階および生息域は，現生同属魚類における腹鰭長との比較により，底層遊泳段階の大型の未成魚か小型の成魚であると考えられる．また，本種の産出した層準の古水深は大陸棚斜面と推定されており，現生種と化石種の生息深度は一致する．

（昆・吉野：〒903–01 沖縄県中頭郡西原町字千原1番地 琉球大学理学部海洋自然科学科）

北海道の渡島半島臼尻沖より得られたオシマオキカジカ*Artediellus neyelovi*の稚魚

武藤文人・矢部 衛・尼岡邦夫

本論文 44(4): 357–367

1991年から1993年に同海域の水深20–30 mでドレッヂ採集によりオシマオキカジカ*Artediellus neyelovi*の稚魚24個体を得た．得られた本種の仔稚魚は8.3–23.6 mm SLで，すべて鰭条が定数に達しており，前鰓蓋骨棘，頭部側線系および頭部皮弁の状態に成長にともなう一貫した変化が認められる．最小の個体においてもすでに眼下骨棚の形成が見られ，成魚と同様の後方に細く伸長する形状を示す．8.3–10.1 mm SLでは前鰓蓋骨棘数は4本で頭部皮弁は微小な眼上皮弁のみが認められ，頭部の感覚管は浅い溝状で，体側の感覚管は全く認められない．14.1–20.0 mm SLでは頭部側線系が完成し，前鰓蓋骨第2棘および第3棘は退縮する．20.8–23.6 mm SLでは尾部の側線溝もほぼ閉じ，本種の分類形質は一部の頭部皮弁を除き完成した．本種の神経弓は8.3 mm SLにおいては前方の3個が左右に開いている．14.1 mm SL以上ではこれは最前部を残して閉じる．この最前部の神経弓は71.3 mm SLの成魚にいたっても閉じていない．また透明化と二重染色の結果，稚魚では成魚には見られない微小な変形鱗が観察された．

（武藤，尼岡：〒041 函館市港町3–1–1 北海道大学水産学部生産基礎生物学講座；矢部：〒041 函館市港町3–1–1 北海道大学水産学部機能生物学講座）

南ブラジル産カマス属2種の初期発達

松浦康修・鈴木和子

本論文 44(4): 369–378

南ブラジル南東部において採集された標本に基づいて，2種 (*Sphyraema guachancho*及び*S. tome*)のカマスの稚仔魚の形態の発達過程を記載した．発育初期の仔魚の形態は似ているが，*S. tome*の仔魚は小さな黒色素胞が中脳部にあることと，一列の黒色素胞が腹中線に沿って下顎からisthmusにかけてあることによって，*S. guachancho*のそれと区別される．発育中期の*S. tome*の仔魚は*S. guachancho*のそれに比べて細長い体型を持っている．*S. tome*の仔魚の形態と黒色素胞の分布は，北大西洋の*S. borealis*と似ており，一方，*S. guachancho*の仔魚は，紡錘形をしていること，腹鰭が前方に位置すること，及び尾部に黒色素胞の多いことから，*S. barracuda*に似ている．しかし，前者は後期仔魚期及び稚魚期に肉質の突起が下顎先端に存在することにより，後者から区別される．

（サンパウロ大学海洋研究所）

日本産ササノハベラ属2種の繁殖行動と生殖隔離

松本一範・馬渕浩司・幸田正典・中坊徹次

本論文 44(4): 379–384

ササノハベラ *Pseudolabrus japonicus* (Houttuyn, 1782)は，最近の形態学的研究により，アカササノハベラ*P. eoethinus* (Richardson, 1846)とホシササノハベラ*P.*

sieboldi Mabuchi and Nakabo, 1997，の2種に分類されている．それら2種が同所的に生息する四国の岩礁域で繁殖行動を調査した．両種とも，オスは個体ごとに配偶なわばりを持ち，その中でペア産卵を行った．ペア産卵は同種間で行われ，異種間で行われることはなかった．これは，形態学的に区別されている両種が生殖的に隔離されており，生物学的種概念において別種であることを支持する．両種の繁殖行動は酷似しており，同所的に，同時期，同時刻に産卵が行われた．2種の体色および体サイズが異なっていることから，同種内での視覚的な配偶者認知が，交配前隔離機構として働いていると推察した．また，異種間でのストリーキングが1例観察されたため，交配後隔離機構についても議論した．

（松本・幸田：〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部動物社会学研究室；馬渕・中坊：〒606-01 京都市左京区北白川追分町 京都大学農学部水産学科）

オーストラリア産のフサイタチウオ科の新属新種

町田吉彦

本論文 44(4): 385–388

オーストラリア沿岸のアラフラ海(9°18′S, 133°25′E)の水深146 mでトロールにより採集された標本(51.6 mm SL, 56.9 mm SL)に基づき，アシロ目フサイタチウオ科フサイタチウオ亜科の新属新種*Hastatobythites arafurensis*を記載した．本属は額部と吻部にそれぞれ前方に向かう小棘を備える．額部の棘は露出するが，吻部の棘は皮膚で被われている．本亜科にはこのような2棘を備える属がこれまでに知られていない．また，本属は頭部に鱗がない，体側が鱗で完全には被われていない，主上顎骨の後半部が拡張する，主鰓蓋骨の上方に小孔を備えた皮弁がない，主鰓蓋骨に明瞭な棘がない，両顎に円錐歯がある，前鋤骨と口蓋骨に歯がある，第1鰓弓の発達した鰓耙は3本，腹鰭軟条数が1，胸鰭基部が長く鰭条数は16，尾鰭鰭条数が12，鰓条骨数が8，腹椎骨数が15，第6から第12番目の神経棘の先端部が平坦であることを特徴とし，これらの形質の組み合わせによっても既知の属と区別できる．

（〒780 高知市曙町2-5-1 高知大学理学部生物学教室）

ヒラメ仔魚の相対成長

河村功一・細谷和海

本論文 44(4): 389–398

ヒラメ仔魚の発育過程をモルフォメトリーの視点から再検討した．ヒラメ仔魚の発育解析の新しい試みとして，相対成長を改良したものと主成分分析を用いた極座標分析の2つを行った．相対成長では，成長指標として全長の代わりにcentroid sizeを用いたところ，全長を用いた従来の方法と比べ各形質の変化をより明瞭に追跡することができた．極座標分析ではヒラメ仔魚の発育において2つの変化点が存在することが示された．これら2つの解析結果をまとめると，ヒラメ後期仔魚の発育は4つの相から構成されることが明らかとなった．変態という観点からこれらの相に，それぞれ浮遊仔魚相，前変態仔魚相，変態仔魚相，後変態仔魚相と名付けた．

（河村：〒516-01 三重県度会郡南勢町中津浜浦 水産庁養殖研究所；細谷：〒386 長野県上田市小牧 水産庁中央水産研究所）

カレイ目ウシノシタ科の*Bathysolea profundicola*および*B. polli*の分類ならび*Bathysolea*属の検討

Martine Desoutter · Francois Chapleau

本論文 44(4): 399–412

本研究の目的は，i) 深海性カレイ目ウシノシタ科魚類の*Bathysolea profundicola*および*B. polli*の分類を明らかにし，再記載すること，ii) *B. lactea*および*B. lagarderae*の分類を論じること，およびiii) 本属の単系統性を調査することである．ほとんどの調査可能なタイプ標本を含む115個体の標本は調査された．*B. profundicola*と*B. polli*は頭蓋骨上方の背鰭担鰭骨複合体，背鰭条数，尾舌骨の背枝と腹枝間の角度，および背鰭の最終軟条の相対的な長さによって区別できる．また，両種はウシノシタ科の中で形質の独特の特徴的な組み合わせを共有し，そしてそれらは姉妹群であると仮定される．

この研究は*Capartella longisquamis*および*Solea greeni*は*Bathysolea profundicola*の新参同物異名である．紛失した完模式標本の記載からのみ知られている*Bathysolea lactea*はCabo Verde Islandsからさらに標本が捕獲されるまではその有効性が保留される．胸鰭の糸状の形態および腹腔と鰓腔の内側の暗色素胞の存在の二つの派生形質によって本属は単系統群であると定義できる．だが，頭蓋骨上方の背鰭担鰭骨複合体の研究はマダガスカルの沿岸の深海性固有種である*B. lagarderae*および東大西洋クレード*B. profendicola–B. polli*はそれぞれ相互によりはそれぞれは他のウシノシタ科分類群と一層密接な関係があるらしいとする明瞭な証拠を提示している．ウシノシタ科の再検討が完成するまで，上で述べた*Bathysolea*属内にすべての種を入れておくことは適当である．本属の種の査定の検索を提示した．

（Desoutter：パリ自然史博物館；Chapleau：オタワ大学）

韓国から得られたガンギエイ科ガンギエイ属の魚類の新種

鄭　忠勲・中坊徹次

本論文　44(4): 413–420

韓国の南亜部沿岸の浅海域より刺し網で採集された全長735 mmの成魚の雌1個体に基づいてガンギエイ科カンギエイ属の新種*Raja koreana*を記載した．この標本は，12破片に分節されている肩帯の前担鰭軟骨の前端が吻端（吻端翼状軟骨）からかなり離れている；頭蓋骨の吻軟骨は基底に関節がなく，厚いが背面からみると細長く，糸状軟骨が吻軟骨の基底に付いている；吻部の両側は肉質で非常に厚い；ローレンチニ氏瓶は体盤腹面のほぼ全域に分布し，総排泄孔の後ろまで広がって分布する；尾部棘で大きなものは大部分前方に向き，小さなものは大部分後方に向き，第1背鰭の直前と第1と第2の背鰭間に一群の肥大棘がある；肩帯軟骨の前門橋がなく，後下泉門は膨張している；眼が大きい；尾部は太く短い；腹椎骨は28個，背鰭前尾椎骨は57個である；新鮮な状態で体盤背面の真中に縦に不定形の1対の大きな黒色紋（中央部は灰色）があり，もう1対の黒色紋が胸鰭の腋部にもある；新鮮な状態で体盤の腹面は感覚孔，鰓孔，総排泄孔，尾部の一部を除いて黒灰色である，等の特徴を持つ．

（〒601–01　京都市左京区北白川追分町　京都大学農学部水産学教室）

南シナ海産の*Brotulotaenia nielseni*（アシロ科）の標本

町田吉彦・伍　漢霖・鐘　俊生・遠藤広光

短報　44(4): 421–424

1982年に南シナ海北部の東沙群島近海で，中国南海水産研究所の調査船第704南鋒号がトロールにより中深層性のアシロ科オビアシロ属の*Brotulotaenia nielseni*1個体を採集した．本種はこれまで北・中米西海岸，ニューギニア北部，バンダ海，アラビア海，西部インド太平洋熱帯域で採集されており，本報告は太平洋における三番目の記録となる．本標本の脊椎骨数および背鰭・臀鰭鰭条数(76, 101, 76)はこれまでの*B. nielseni*の種内変異幅(68–72, 85–91, 62–72)を大きく越えていることから，本種の脊椎骨数および背鰭・臀鰭鰭条数にはかなりの地理的変異があると考えられる．本種は中国沿岸からの初記録であるため，新中国名納氏花鱚鼬鰯を提唱する．

（町田・遠藤：〒780　高知市曙町2–5–1　高知大学理学部生物学教室；伍・鐘：上海市軍工路334号　上海水産大学魚類研究室）

Platycephalus americanus Sauvage, 1878は*Grammoplites scaber* (Linnaeus, 1758)の新参シノニム

今村　央

短報　44(4): 425–428

原記載以来，ほとんど報告されたことがなかったコチ科魚類の*Platycephalus americanus*の完模式標本を再調査した．その結果，本標本はすべての側線鱗に1本の小棘と1個の感覚口がある，頭部背面に顆粒状突起がない，4本の眼下骨棘がある，頬に感覚管がない，臀鰭軟条が12本，鰓耙数が1+5=6，眼径がやや小さい（頭長の20.2%），両眼間隔が狭い（頭長の11.4%）ことが明らかになった．これらの形質は西部太平洋と東部インド洋に分布する*Grammoplites scaber*とよく一致し，本標本と*G. scaber*の間に顕著な差異は見いだせなかったため，*P. americanus*は*G. scaber*の新参シノニムであると判断した．原記載では，*P. americanus*の完模式標本はアメリカ合衆国のポトマック川から採集されたとされているが，コチ科魚類は西部大西洋には分布しないため，かつて指摘されていたように，本個体の採集記録は誤りであると考えられる．

（〒031　青森県八戸市鮫町下盲久保25–259　水産庁東北区水産研究所八戸支所）